貞享式海印錄

數字 送字
食夜 彩色
器 文 大
種々付方
諸変格法

六

へ 5
1117
6

貞享式海印錄六

曲齋述

多佐者

□数字美用我不煩

□合字凡数字も合字も再用の妻を之りて文字の上にて然むへくす賀へハ一盃ゑ山一ツのめき法治の捐ゑの再ゑ君ゑぬ三句已下ゑ許すへし

▲かくいへども支考設るも日洲我多しえらう数字い孝盃もおく義も扶それハ佑字ゑハ教ゑ字稱ゑ教ゑて我を許ゑい蒼門の変制へ

匂ッ　ゑ以セッの法のたんさくり牛

華ゑ孔ゑ今ハ講へことつていやい

女房の砌て一ッのむしゃ許ゑ

白足　尾張もいせもナ分の秋キ角

山桜の門ゑ拙ゑ山の月秋ゑ

春ゑ涼つく一対の雪垢寒玉

花をかゑもく黄ゑ白流へ桂ゑ

巳糸て男ゑこの手の状を

百日　孔も未和状山ゑ

吸物ハ松もゑきゑて柚の白ソ由

ゑれの男ハ一弱弟子巳ゑ

□拾遺　ゑ惚てゑれたゑ入柳士

イ　唐の唐ゑナ拙ゑくる、香吹

扱たてハ扱のたゑゑよ右人充是圓

市尾　何ゑ一至ゑん相ゑして状委均

書洲　幻位の二字ハ孤ゑ家の扱

人の情ゑ考ゑて居る、茨業

ひすゑゑく流ハ二ゑゑ打考て

□山コト　漢会の事ゑ也ゑすゑ十ゑ近

法ゑ色て事門をやく涼ト坊

淫きけハ三ッにッゑッセッ己

一ゑ丈ゑ欠て良ゑ通ゑ乱　者山ト

古今二 送字は用ふる事あれども送字は不用

◀黒字を墨あり古式と思ふ上下並び共に墨なるべきなり

□送字は不用

カ仙十四

多者

一粽もきれぬよりぬ入物の中
月を差うとてうり物花
時雨のまのこ百いまの中より一筋の長
幣の長ふ六この人
一文通てえさきいが残
一筋より仲の奥を分ちて
鮫坂と五又中ないへいえよ
八宗を講よりもちて蔵厂屋
二人の自慢物てけあふ
一まえ元えぬ汚きの羽本さし
かもかす侍るも侍る残又百
みろりも出る十月の寄
まこくとこ人逆まて丹波残
百歩を分ひ深さる
むつくりと起す種本の一龍
児まうしと起す種本の一龍
一匹を繋す種の汚れよ入う
島のもやもやもはは十八を
熟に業をのむ見よ通るその月
りうめる一分を汚す塊のふん
坂原とのたりよて汚ふふき
武士のさらう人すり挑ひ
振ちまかく羽二重の夫烟逆
日和いつくく土用と彦
花さうり れよ明くるは季の波

カ仙十四

多者

芋むく一ッ場の振回
一森入りて共波ハ宮の月
むもふくらむ妹もふくらむ
笑よおくナこ一重の寄よそて
息笑ふ親父ハ一人釜の前
ナ夜ハ滝に耳の極
かも川も一せよ目の涼波
大の猫よ秘蔵の猫も一人前
亦の吹しもく〜ふりて
名人のまりに一入者の月
鶴令の共尾よ月て又一羽
方〜ひの京立うけてふす
めエふき清い遠い一部より
女市花五笑よハもく〜ぬ汚の
疾まよ集ハ溝居〜てある
調合い勘異ふ分ちふふ分
五昔匂の分ふ月元もそいつきて
格の掃除よ川のよこる
入智の除ふとふそ〜る晒
ふ数字ふ孤
ふもふ一日塚のふく種
さいつれ
屑ありと五
老いふふと五り種ふる部屋ふ
この一谷い栗の汚年夜
七十よふる
こ天通種のさ〜を
タテ
侍よふ社の流を裁いて
宗合まてハ明ふいのう
ふ盗鴨の香よふれて
百石も位牌初りのみ〜さき
外ふ五なて義小汚ふ

みて本本を本仝茎茎ヲ茎に一日ヲ一日に一月ヲ一月く
異するのミ仝の茎出を文茎に。ゝく。まく。あれいまゐ仮名ともる
上一字ハ。ト出上二字ハ。ト出上二字ハ。ト出三字ハいゝ。ト かくゝされと
る二字已上いゝ。ゝ。ゝて漢すも均明あゝむさるに上一字の時
も。ト かくいゝ誤文或説ハ二字已上の時一月〳〵ト出いてそ
一月月ハ移ふとて一を月ニトかゝもそハ又二月月ハまぎ
きあん何つれも難する付い紙あれとも推てゝむるハ於いふ〳〵さ
れとも他法ハ仮名出あれハ一を月をハ出ゝくれハ一月〳〵の方
ハ定むへ〳〵是ゝ仮名と仮名との差あんれいむ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ
をハ出方仮名も訓異あれハ均仝ゝ方ゝ仮名ゝ訓異ゝ方ゝ仮名ゝ
ら二句もされをハ何ゝを既ゝ以ゝ門下の人この法ハ熟ふゝる者
勘破ゝ法開ゝ日

美枕 くの

孫宴 くと

壬 くと

如 笈

宮自 如 対 筵

こうハ

さよ〳〵 の見ひろふ〳〵る布帷 翁
地狐画をゝ〳〵 拙の哀さ 口通
きぬ〳〵 の虎目に清を惜む〳〵ん 本因
て〳〵 を相めて為る爲あ詠 翁
出付てある 爲の謦吉日 ヤハ
ゆ〳〵 とかき紀さきて製流 翁
ふ〳〵 ときせる為る貝の売 猪雛
いくつくさめのつく紀風 イ拙
さワ〳〵と花の涙よる太ゑ芝 を篋
む〳〵と李て うゝ市立て 一製
孫紀の侍の天宗付て 香函
て〳〵と叶さ〳〵て 香宸
き〳〵と金灯為ゝとゝ〳〵 一由
誰ゝ為らす灯為ゝ 侍業
あこと汨ゝの こる猿の を 一層
て〳〵 松ゝ拙ふ 雪の子 十丈
陳ゝさ寸 床の 至和風荒て 拔 壹
おの〳〵 ひとつ 拙交とる わ拔
ちん〳〵とふる秋の下あ 許女
硯止て庚紀 ゝ 拙ゝ 雅 ゝ 庭深清 独

か〳〵〳〵とさむき岩者
冬の日のてゝ〳〵〳〵とゝてゝき景
主猪に四くゝと四あゝあ若て
ふ〳〵〳〵と叶くの市の埼いふさ
狐若ゝ人 カ子
柏本の御亀の甘のつく〳〵と
城下を三ゝ法 人 水
遠寄の庭賓 有中
多酒ゝ署の管のちゝ〳〵と 共宮
夜ゝ年を黄ハる、ふう 陶ふ
む〳〵ハ皆つれ〳〵と吟やゝむ 弧於
片ハ〳〵の本屋形ぬる 正秀於
巻こ〳〵に冬〳〵ぬ物灯の犬ゝ面い 南枝
ほろ〳〵あめのくゝる物為 物為
一畝の栗も崩ゝ四ゝら〳〵と 不栗
八翁あの今ゝべん〳〵と 両文
△俠貪かゝり残を不過 たハこ去
小猪のかゝ四ゝ猪の猿ぜき 山市
拝深て筆をて〳〵く猿の猪 右分
島ゝの庭ふ葉を巻てのむ 可及
俠嘗のはこゝろ世ハあぢきふき 巻サ
保次者の毋ゝ世ハ 跨哭
門ゝまつ島ゝを たらす笹の版 素後
にあいてゐる孫の赤 貝 ろ九
乃ゝ ちゝぐる君の南風 白雅
托盞の酒をこゝす 巻 東 有蕎
△俠和二去 たハこ去
自来さいて茅のミ友 造 松ゝ坊
自タラ 酒のよゝふゝ嗅〳〵月と巻 北蒙
出てゐきと素もゝうぬ文 ヨラン
さゝ 酒と名のつけゝ破ても鉄さがる
酒 酒ハぬるり巻ど蕎茅一ふく 原ゐ

てえ汁りの汁いさあるあの日　抱妖　与者

△食物こ去

ゆさ食ふさ俗ょ調市ゝ拵こう　文考

他ぬ物よいを数すりゝる法飯の招　山枝

諸のこうゝる者がよい殿の調を猪の上　去苑

前詩をやくいを足ゝ芝辰足ゝ吹　ソ吹

飯の時見の　を　下　を　平　友又

ハタ

夕飯ょ伝ハき　と　とも夕月夜　百河

ミミ

否物くいて太ょ　太ょかゞるい　一字

豆飯ょ粉麻のよゝ　よあさし合せ　一ゝ

ちう

物ハよぎゝふ　も　兄の弟前　素西

赤も美ふ粉も併　水胡　水胡ひやら

豆飯ゝ夕飯ゝと　俗太　俗太

手

月兄の弟ょ飯ハ　ひくひ猪ち　花少

ふの伝ょ飯ハきた　ふき燥や　苔毛

山市

さゝこゝろ乃て破　物を出す　葉少

夕飯の物未ゝゝ　葉ト　漆ト

つミ交ょ藥魚かさ　こやゝふ酒　自猪

焦

せ美碓むゝう伝や　ゝう伝やら　祈

美ハ近て仕四ふ　蔵ふ　ソ当

おまよハくハきて　てあハぬ百の　酒角

蔵

△非飯食物日伝我不姫

素穀類粧菓類物海の魚魯粧手豆ふ魯菓子魯酒魯素酒魯食猪

蔬飯類

冬まつ羽豆たゝくるゝ　ヤ多

冬

蕗の汁物のうひを拵ょける　羽笠

菊

俗物ハいハず飲冬をのむ　風艸

飯くひょりて果て松沢

手

る市のけふ野地の時方直　異角

むゝゝハ米が百ょハ牛　冠那

強るまこまる　辛ハ入弱　覚後

コハ

●峨岩ょ瓶底ひゝる貴の月　夏走

あるをくひょ麻のこすゝ　牡要

敵

喰さぬ定法を弧の洛を　摂柳

物とに寄の祝ハ湖ょ基て　幼角

●ゝふの粮を小猪の粉を　ハ鶏名さうゝ　山リン

秋ゝつを布猪の粉をもつされて　春英

キシレン

菓めゝせたまふ　ふよにゝふ　硝天

●粉猿の者ふ性ょ　性ょ道りどゝ　あ士

●者人ょ食猪ゝた　ゝたる去翼毒　汗六

ウ陀

茗利力ゝゝゝこ　ゝる毛孔　花已

茗も又さ四る粉　粉の赤麦ゝ四　多者

△鉄食付匂　仙麦

一俵戸　法飯を鬼一ロょ嘗ひてゝゝ　翁

号ょ減法せ美うめ漢　从言

粮　蜂ゝかる陪るの下の渇う酒　リ茶

砂神の陪を双　六乃法

茶州　陝陪ゝ神の青　青ょ猫の雪　牧者

よそハ味噌ゝ　ゝる夕飯の苦　浪化

古今四　飯鍋茶酒代粉黄石を黄俗ょ百匂ょこゝ

星月日　酒ー　ー　あるゝ酒白ょきあどゝハり粉ょ一ゝ上戸　肥文

下戸碎碑搗蛋ふの嗜面をゝ粉食百匂ょ百匂ょ百匂ょ百匂ょこゝ

▲かくいゝとゝもき角支考酒者の然らさるを見て二出を勘破せよ

何所ょ二十ふ弟を者ゝざるぞ

△酒日訓面法　食ょ酒

酒

松風の　食ょ酒を　酒をのミ愛ゝ　宋多

誠て者と酒黄　ひょ功く　翁

酒のむ焼のいゝ　ゝふょさひしき　相茶

明おりょ酒をゝふる揭や　苔及

嗜ふゝハ今のむ酒も毒とふれ　山リン

渇酒ょてたまふ　雑　現

△酒者訓鉄碓搗蛋ょハり又去　東麻

ゝふ目のさあぬ酒のゝゝさき

粭

碎て又搗るこのてしのうへ　翁

菜よ酒よまづあのあさ〳〵う　紫

瓜十分よ去　蛮

久月日よ〳〵　酒　延人　き角

酢を孫うしうしさる作　ト宅　盛京

酒供すむ日暮日もこや入て　肥茶

お方よ酒を日暮日もこや入て　角

碎て座山の室の暖　紫

白光

あつき〳〵と考の酒もう　本示

新

酒と　筋波よ縁〳〵お砂方　文商

酒と　筋波よ縁〳〵お砂方　泊寂

さへ　公　文よ初るお炙ミ酒　泊寂

三

野酒香ふ〳〵香うておけ　示右

△飯　面去

宮光

飯は賛すよ上の去賛　保あ

飯は賛すよ上の去賛　菩寿

セラ

金飯　金の　磨てゐる　り宮

金飯　金の　磨てゐる　菩二

△飯　菜丈器とうい五去

飯

飯次よ大槽の猫も附て出て　左林

飯

飯　角よ会ても　角流

白タラ

目。菜さ〳〵て菜のミ支　林ミ坊

白タラ

在いさ　夢の先茶こんても　函書

三笑

渡とても菜こんを見れいお酒ふて　方賀

三笑

板木ら菜屋て賀の漆やら　揚東

枕

△菜　面去

ツルモ

遠よい菜漬くいする音も自らず　函柳

菜よふぐさむる　考のるす　徐東

菜よふぐさむる　考のるす　徐東

立菜ふ金てむ、のこせる　旦井

菜酒の面ふ人のや、音　寿神

栃山

栃山

栃山

酒汁は新云〳〵おを去てにあ　文考

酒汁は新云〳〵おを去てにあ　除風

菜菓子もちろと菜の瓜形

△粉　面去

は粉を喰ていあいぬふの客　孔川

は粉を喰ていあいぬふの客　泊楓

歯ぬけを初て粉の焼米　粉皮

たべつけぬるんひん餅を見ふ〳〵ん　嵐害

餅の丸を搗り出すりや

△米　面去

焼米をろつと一七菜よ俗て　壮奚

小考天赤よ米だるゝ左右　列堂

餅米たくいふ菜米よけり　許六

たん〳〵と米いいふ菜米よけり　許六

△菜子・塩・池・着・形去　粉

去めやちふ面よ菜菓　菜暖

面と盆の菓子つゝむる　和笑

面と盆の菓子つゝむる　雪邦

長ばうう形も菓　晩柳

盃よ塩をつま　考沈

池何と　考ろ　源る

悦面の　を池よ搗〳〵毛て　翁

悦面の　を池よ搗〳〵毛て　呂林

ウ考のうれたるさうふ賀りて　七西

たゝふ　ふ　ておく者搗四ふ

△菜新面去

菜の名代　考ひろめ　さう　松人

菜の名代　考ひろめ　さう　松和

食ちぶき金こうれいいつ　松和

菜第初よ打せて　ゝ　か我

七がふる〳〵て菜味こほさす　き

菜第初よ打せて　ゝ

△酒　飲酒多ういり面去

酒汁は新云〳〵おを去てにあ

酒汁は新云〳〵おを去てにあ

▲香川云〳〵て二去の月酒あり日訓用うはりていみ去う面去て

可ふ〳〵ん

白タラ　吉川

禪　云るい酒と　神　文考

菜酒する〳〵ふの俳も菓の長い

茅ワラヒ　古フルコ　二去の俗に用ゐ

浴衣のきのうろふ酒る　乙甫

浴三気もさめぬよ　ふ意用　昨ウ

浴の色あくる杜の神風　金袋

浴八上よ出て見る方の人通　挑脇

雇き抜日も浴よ入りよ来る　遠支

茶九のくせよあうう浴の山　幸平

浴九の山の出る日ぢいのきゑんあり　赤羽

洗見の浴いちり〳〵と一茶　道

百今四　夏歌をおう〳〵と云ふ〳〵ても一度一度一七

▲夏歌いの俗加ふ制度きやと云ふ〳〵ずともお去えて可あんなふい菓子の俗

て有る〳〵

□衣替二去　カハ二去　セア俗者

白浪　雪下りて独指かいとる秋の露　法華　白

大れ若さる庭の雪　揮　翁

ふ　手惜るめ志めるこ、ろ静うあり　孫健

衣若て振すこ、ろ静うあり　翁

宮九　振きて寒むき袖屋の白張　風源

咲う〳〵るぎを花〳〵神貴て　本塚

壬　寒よけさバや若る　若

物衣よ下初の志不し　物影

外形のす若あれ　杉風

他をするバうり雪のふり神　ソラ

シ　羽おうを質よ若て庶さぬ　宇陀

粽四ふ笹の〇四よ神ぬきて　幼角

一季庵も簇地よ絡屋を引出さき　巴角

袖よあ〳〵てえて孤宮む　一字

△非衣替相伝不蟲

夜具冠お袴　常風　見漢織お

●物寒たいむ　物若の蒼　鶴

一七日　物寒よう月ハ宮ぬよ海る、　杉風　翁

●●乙女の姿　自瑞　風

●●百松よ袴の袖　自瑞　風

見〳〵うきと対ぶく　袖　翁

面　山枝

●袖　衣替

●袖てハあるうと　衣の古風七　翁

非人も知うぶち　相茶

抜うぬる一ウ羽形のひとつ　孤　翁

あ、　ゆさよりも池袖　浮する玉　孤人

形打てうて海る　清人

きるものを拾よう　嵩考

●鰻うくとて帯やたくきり　宇陀

夕良　田染もやせて袖袖の一ッお　我笑

蓮うつ身の孤よおどろく　角

●ひがんよハ江戸ふの宮の帯　素後

うも　むいよ詞を　門浪

●そ孤よ月病の涙お〳〵　撫　酔笑

●実人う孤見ハ面立の孔入て　広住

笑打　ひよおう巻ぬ和を　麦林

笑さうう石の考仮も小袖摺　金朶

△衣よ二ニ去　茂秋

玉　袖押つよき寄のころも　挽市

紙衣羽おりをすこ〳〵白ハせ　式之

月宮よさび〳〵〳〵れ〳〵孤衣うふ　許六

句　恨のふく巻てつるい夏　夜村

△衣モ浸又去　衣

綾　義入の天の羽衣　左今日

袁衣おこ若色ハ　若て　鍍

以ゆ巻て神孤衣袖ハあ〳〵　国東

十七　但写赤のよう和ひよ袁衣　貪曲

袖　きぬ〳〵のまゝ振袖よ　会雲

白きぬよ義と志のふを　白主

△袖・懐又去　自笑

一七付　巻の補意の廣袖　風

茶ゆさてき袖ま〳〵待ふ風巻て　杉風

つらら人色のめりけの袖袍　、

巻ミ衣濡あらひ〳〵神の月　、

◎借よする巻のふ小袖二三百　袖袍

ざへ

髪を髪を代ふすそで 乃 髪 星系 神松ト 神伝伝

もきて 袴を小あわ くむ 東 うつ女 鈴士

庚 神や 陸玲つ 東 よ

片 く 神よあとい 旅の町

物 夢こきも 芋ある 袖の 西 年 此

れ 袴よ天の羽衣を又食 寺 此

、 袴よたつ巣を 神よ すく 角

芭 蕉 の 懐 高 高

情 蕉 ま 〜てよくい 石 、 翁 宗 端

△袋・布 西去

ぱ袴 大 蕉 の 袋 ハ あ よ ほ ろ ひて 傳 麦 翁

よ 〜 や よ 〜 ゆ 糠 袋 の 池 る 世 よ

匂 乳 こ 〜 ろ の 布 を た し あ む 許 六

袴 ほ ら く と 麦 ふ の 布 の 油 気 立 て い め り

又 六 丁 布 個 不 せ る 面 見 え て

布 袋 や ぶ き 次 才 の 秋 の 風

□ 麦 蕉 筑 城 不 蟹 多 者

麦 ふる 蕉 戦 よ お 城 を 雛 す る 古 式 之 蕉

変 化 を ま ま 〜 す

次匂 武 士 の 母 蕉 う を 蕉 よ 々 る 柳 あ

女 ハ ふ く よ ま ま と て い む 方 丸

あ ち ま 〜 く 読 の い つ ま る 恨 翁

刀 読 ハ 男 女 の 説 と す る 蕉 ふ れ 〜 も 許 さ う 力 兮

書 の 狂 蕉 の 函 の 笠 弧 〜 く 翁

冬 笠 クル カヌ 言 雅 う 片 神 を と く 翁

ひさ ヤクワン ヤリハコ キリコ 化 人 と 搭 を 投 よ 狂 ほ ぐ ん 言 又 ト 函

け 〜 の 一 言 に 石 を こ ほ す 孫

三 日 月 の 東 ハ く ら く 達 の 夢 翁

く ら う よ 業 道 の 下 を 磯 翁 曙 序

侍 言 を よ む る 盃 皇 口 秀

い き り た る 読 一 笛 よ 蛙 岩 及 肩

あ 汲 う ふ る 鞭 庵 の 秋 蛙 径

さ ワ 〜 と 切 よ の 低 す 風 吹 て

△日 侍 蕉 戦 二 去 二 嗣

油 蕉 仮 蕉 雲 ふ 蕉 立 蕉 雪 ふ 朱 蕉 武 蕉 表 蕉 大 立 蕉 ま 蕉

面 蕉 孫 蕉 女 巧 蕉 出 画 蕉 振 蕉

い ぢ あ 町 篭 巴 分

コ ハ 吟 滝 の あ ち ら こ ち ら よ 風 星 岡 次 こ ち ら よ 風 星

、 燒 止 て 度 捏 も 静 る 孫 滝 許 六 静 る 孫 滝

ヤ ヘ ホ キ 辻 響 の 名 不 き て て い る た き 弧 柳 国 ふ 吹 方 て 示 右 弧

響 栗 を 月 の 京 よ 吹 を ま ま ら ひ て 弧 形 秀

ひさ 武キ 小 鼓 よ 見 う 遥 を あ ま ら に や る 弧 秀 も お ん れ て

日 タ ラ 瓶 の 思 る ゆ み 侍 う に や る 弧 秀 も お ん れ て 加 越

、 い ら ず と て 大 鶏 茅 も 侍 う に や る 弧 秀 も お ん れ て 加 越

よ 〜 あ ら ま と 見 る 矢 扉 風 加 越 ハ ら と 弦 支 考 海 岩 支 巣

川 こ さ ば を い ま 橋 ハ ら と 弦 支 考 海 岩 支 巣

渡 う ふ く る 空 坊 の 掾 海 岩 支 巣

冬 、 高 よ 朽 け 一 孤 の 読 支 巣

冬 ひ や る 笠 よ よ 里 の 風 ま し 午 海 ㊀

冬 ま い る ミ の を 地 分 の 吹 風 桃 尼 海 ㊀

粘 強 き 鞭 茅 ふ き 蓬 茅 て 桃 尼 海 ㊀

髪 く せ よ 柳 の あ と を 探 亜 し て 乙 海

△笠 柳 西去 古今日

山コト い う さ ま あ き ハ 茅 ふ 〜 虹 笠 八 兼

谷 の 戸 い つ る う ぐ い す の 笠 る 波

地 柳 切 て 牡 丹 よ 日 を 寝 ふ 笠 介 我 翁 翁 書

白 兄 笠 蓋 い 、 あ の す こ き 多 者 影 業

ツ ハ ノ 侍 る 、 徒 士 そ う ろ く 神 笠 蕭 山 翁

す い 掉 よ 笠 も 蓊 も 斤 台 て 翁

よ 柳 よ 右 と ㊀ の 侍 打 樽

翁 ん 茅 の 柳 の 侍 ま 〜 て 樽 寿

波 ふ ら ふ く に 言 の 脊 柳 茅 呼 翁

あ た の 柳 こ ろ を 元 ん と 涼 茅 樽 寿

柳 の 湾 あ 香 蓄 般 く む 樽 寿

茅 布 の 右 と ㊀ 辛 螺 を 柳 く む 樽 寿

次 匂 △杖・箱・茅・箱 西去

杖 の 滝 木 ハ 秋 敷 杖 の 滝 木 ハ 秋 敷

杖 突 の 童 石 も き う ぬ る 蓬 芝 一 乗 お 一 乗

ミ ロ 月 ツ エ 地 秋 地 秋

ヒナ　タハラ　あ十　アミ

儀の月　犯千う儀のふまくさき　翁　芭二
儀の。ちりをさ、くきるあ
胴の奥　寄ふうらうおあまで　芭杯
あミの侍和所を井戸、浩し蛋

△搭・蓋・板形去

山カタ　クル　書巨　フタ　句　イタ

汎とい天元ぬ麦まきの搭　自狂　歌抗
汎のふい搭ふ〳〵わ〳〵ゆ〳〵わ〳〵ゆ〳〵て　為角
椀のふ〳〵階るの板よかゆ〳〵て　小考
一日の除ハ地獄の釜のふ〳〵　来他
青の麦ふのわる　狙板
瓜苅る戸板の上の魂寄

□去作二去

次句

天帝ニ月あを去て写て上キ角
秋ニ対して天ニ月あを去て写て上キ角
除氏をうつすくいかりく丸　ま弱
夕月を庵ニ画く秋の風　ま蓋

△非出・体和歌不題

宮九

あうく度ニ寄ハ考〳〵ふ搭ゆ　一栄
星　集ニ拙女の名をもる月　翁

△集冊ニ詠此句トカハリ三去

次句

遠句荘ニを以て天るべ　角
灯ハ麦と詠〳〵ん月　翁
、　詠おく月ニ搭義を設る　丸

蔡　諸の字ニ秋の寄の集　為
宮　宮ハや秋の寄の二ツ　え搭
宮　宮と汎功の寄の集　青濤
宮　宮ハ秋の寄の二ツ　る蛙
宮　宮と汎功の寄の集　宮中

経去

東山景

冬　考逆

板　考低

△汎考逆俳文トカハリ去

秋の比旅の句逆考いとうり　翁
麻刈といふ歌の集　何む
下ハ弥生千句の俳諧ニ　め
ひよつとして歌のみりを高〳〵ニ　酸ふ

秋迦ニ賛する壁のうりあ　杉風
山の四狸の寄ニ　石キク
寄ニ考て女ニ賛　翁
尾　俳や鶏杜　俳り〳〵ニ
俳を味ひて　叩陽
汎考　汎に作る　湖ハふ〳〵
逆　寄の中ニひとれと三、の月　呂吹
コノハ　法ハ汎ニよりひて撰集のさ　吉吹
日ヲ　信ハ西ニ百ニの寄を巻〳〵れて　浩自
山コト　ハ文ニ章状トカリ去　用什
ニ　状の返ニの日ハ巻れてある　秋祝
ニ　ニ章の汎ニよりの　きぬ〳〵の文　八業
奥　陸六　墨の文すうし　りのぐく名州　文考
低　いせの状日の　ろうけてやる　月　浩風
ヒナ　ろうけてやるお役の文　去来
小ふきの文を綿る村て　浪化
返ニすせぬ紙い掃て掃ふん　子　浩
△状・文・札面去　嵐書

文百句ハ法り　文考汎面去あり

拓十　状　返十六　ニの四の文ふ　有琴
山カタ　画　状ハ仮ぬ状　蓮二
、　舶十五　状　打て紙て　白狂
金詩　文ニ　栗ル
文ニ　文ニ高て気ニ気ニ　青城
文　蕪十三　蕪ニよりうつ〳〵を　又美
コノハ　下ニ札ニ光の椀る　浪拙
禁　制札を　ぬくる乙　壺走
禁・詩・蕪形去
張糸　月　おの境を分る　琴風
ウタ　詩ニ旅の又寄　卯〳〵いさむる　不ト
難　詩ニうく詩ニ陸る寝める　キ角
エ　詩ニ詩の詩ニ陸るその改ニ高る
一　元詩　巻ニ為ニ行を〳〵　仙
スミ　巻ニ為ニ羽織ハ蕪ニ漆ニとる　翁

□吳天許こ去　カハイ印ヒ之去

蕉つよい燈　灯のおをりて二去よ許こさり

冬ふ　茶々ふりさつ　曙　竿の鐵　全寒

燭　雪のゆき　盃よ　かゝやきて　翁　叩燈

拾　地面　大よ　逢こう　涙の赤き　灯

忘れて　焦す　仮の　燈　虎

し　灯　籠　いと　ふ　判こ　りの　文　山リン

小　花　袁　ハ　ぶく　を　迫る　墨　大　燒　紀　多

かも　灯　明の　大も　人よ　けさ　せぬ　素　後　時

燈　付て　奏　音　竈の　金　茶　時　栽　竹

一　日を　見ぬ　金　の　灯　大　湯　風

一　搖　赤の　宵　る　仏　藥　の　燈　う　つ　君　きて

三　カ　仙　と　や　〳〵　と　兒　を　あ　ふ　る　茶　燈　て

淺　み　明　き　ハ　き　四　る　灯　大

△日大作之去

あつ　ミ　夕　山　初　竈　の　け　ふ　る　秋　風　翁

初　赤　大　を　さ　く　新　よ　白　鬢　金　つ、　不　玉

燒　栗　よ　后　の　月　兒　も　ゐ　ろ　り　燭　嵐　七

笞　あ　げ　て　貪　さ　く　し　毋　の　夕　燈　吳　天

一　き　付　、　南　闌　の　天　地　既　よ　大　砂　許　移　風　翁

冷　ひ　の　ゝ　ふ　り　果　い　冷　焦　、

拾　月　。　れ　て　灯　大　あ　う　き　海　の　上　去　東

ト　拉　灯　よ　大　燭　燈　の　言　け　ぶ　う　、

天　河　灯　籠　よ　作　遊　を　の　こ　ば　若　浪　赤　山　海　岩　芝

、　ま　さ　明　い　の　よ　ま　い　。　接　灯

△那大作拾伐不遍

燒奥燒貧民の竈　灯籠　接灯トカハリ

灯の新　弦　〳〵き　甲　待　翁

匂　山　ほ　と　ゝ　ぶ　ゝ　山　を　出　る　夢　許　六

兒　遠　い　あ　四　の　白　燒　許　海　堂

け　月　よ　大　の　月　ん　も　あ　い　庭　栗　ル　六　き

冷　若　い　男　よ　お　〳〵　い　聲　古　こ

燒　馬　の　み　お　暗　が　ま　し　た　び　の　裡　遠

△大・烟・燒・燒　西去

燭　大　を　け　す　新　の　燈　き　辰　亥　知　是　す　く

大　に　の　夜　の　灯　大　新　う　す　く　山　秀

蕉　燈　の　大　も　ろ　ふ　夕　月　。

笞　燈　よ　い　る　洞　の　灯　去　宜　東

笞　う　ば　き　新　い　ち　か　き　新　の　大　雪　松

、　か　い　つ　め　ら　る　い　大　涙　石

拾　ち　〳〵　ひ　う　る　糠　の　燈　大　涙　石　東

、　ち　ち　よ　大　の　る　毋　こ　し　の　ふ　原　去　東　篇　涙

町　端　の　燒　は　き　た　め　て　大　る　燈　す　、

三　民　、　焦　〳〵　た　る　扇　つ　う　め　新　に　不　有

燭　燈　秋　さ　む　き　袖　の　仮　ふ　原　大　を　賛　て

燈　灯　雲　の　大　は　張　な　の　月　い　宣　、

明　。　日　の　金　の　仮　ふ　む　り　立　あ　伝　辰

ふ　す　ぶ　り　〳〵　指　の　燈　の　月　う　る　翁

綱　。　て　仮　の　賛　燒　る　い

賛　や　あ　白　宋　天　う　燒　き　よ　翁

燒　焦　〳〵　さ　る　ふ　つ　ま　す　く　す　い　元

燒　七　山　坂　の　宣　の　赤　元　宣　う

兒　遠　い　白　美　の　白　燒　兒　さ　れ　て　賛　

笞　。　賛　立　て　り　む　る　る　の　日　二　竹　支　考

笞　る　う　食　を　た　く　も　言　宣　竹

、　そ　ま　た　き　拾　て　原　ち　ハ　る　あ　り　篇　竹　公　多

拾　也　丸　本　を　賛　て　あ　た　る　冬　の　日　公　多　吳　天

初　灯　十二　拾　て　仮　さ　く　毋　の　夕　燈　吳　天

、　小　原　で　た　つ　て　と　言　原　さ　く　東　羽

□吳を宇我不遍

冬い　冬　よ　月　の　涙　き　る　許　六

灯　籠　の　果　も　を　つ　く　地　篇　金　本　尊

白　川　石　の　色　の　高　け　さ　仮　村

行　の　よ　を　甲　斐　の　黒　姫　ニ　ふ　い　於　ニ　播　東

富　つ　く　〳〵　の　孤　う　は　ま　る　多　考

山　中　ぶ　ば　上　も　に　け　の　花　の　涙　凉　ト

自　寿　よ　小　傍　の　ち　原　の　去　き　、

篇　も　名　あ　の　宵　湯　対　寿　加　去

あとうらも裏おもを裁て　丹之　洒十

屋ちまの裏ハ白き夕暮　歩園

丹大工おのう　指子ハ犯ふん　紹渡

菊の料理をあつる裏　朝

△青葉赤白黒舎三去

裏る父の白髪を乾て　口通

何ら何やら青の自　青山

ヤハ　小　萩うもとの白酒ハ　六

山の白ミて寒き丁の声　去其

雑　萩うもろきハ　寒面　時沿

波の月波戸の酒も白ミ　フ紅

山コト　さくあの壁ハ　き角

波面ハ赤の色　鴻面白し　嵐雪

白黒の精ハ　林和

面白い根に今育　松宇

黒。谷のにいい器　求硯

人のさいらぬ松ころむ之　り牛

ち。いめきの中　コ屋

日ュのあるる方ハ赤ゝむ中の色　、

アカ　サル　アヲ

焼。より国の青やきて溪　き　凡兆

黄白むる青　警の匂の青さハ　翁

△色立一巻一

赤坂の名も赤　おうらハ赤ゝして

紅切さやらいう山白　壁

ツヤハヤ　この付会の濃い赤色　有ハ強てするすハ白匂一面の

とん多人〳〵

秋風ハ吹れて赤し　湖春

秋　伏て白けり　猫の赤のふミ　湖竹

白見　小鼓の紅海白　嵐雪

赤紫の芋ハ　神叔

紅赤ハ浸る　みりん酒の酔　之屋

板　白雪の濃を　蕾屋ハ拭せ　拾芝

沼　白矣の実面　ふき料理紅　何由

実色ハ紅　丹ハ黄色ハ紅赤ハ　実色ハ紅

赤白ハ　紅色ハ　実色ハ紅

実色ハ　紅色ハ　実色ハ紅

実色ハ　紅色ハ　実色ハ紅

実色

み郢匠の境界え

[古今五] 式は低句より言句へ渡るなり秀逸の体なり言句より低句へ渡るあり自会は言渡より自るの渡るむべし語続の相るのちくいあるまきとも言句より言句へ渡るまきえ

▲低句より言句へ渡るなり秀逸の体なり行逢ても語続の相るは句法をさてこの自主は歌はいはりてたるばくの自句あるを次の作者はばくよ猿たてさせ〜人を押る詞と見たてばくといへどもあのばくはお役ふたつ人あれば必あるとるあるといふ主を分るうこの先業〜名はをこそ云ふあのは尾異は句あるを右から云ては分味雪さる有るばくとは〜とあ〜渡るうとで元詞を渡むは

かくいはでいかあはやるは時よするるえ

八夕

[拾遺] 拾遺は拾るを分てさゝ波 友みさゝ波や寄の岩 ちる星目夜 行竜

芳はびたの言の作家あるは波句は波辺ゝてびをびく拾と見立自詩宴は現る体を分るうる

書日

[拾遺] さびしさは 物〜さは 物〜うら〜 翔あこ空 秋の風 岩庫 ろ九

芳の同持寄を風の侵よきく片望の菜尾と見たて、夢物会を岩ひよせるうさびしさはと押るは芳の海〜を一傷する一体の分るえ

あ。あ。笠

[拾遺] 山 あるは はば 如 右賀の四 あ 屋元 芳は右賀の現家を称る句あるを次は今の家に右ばの稀るる居宅の築山と称るう

宇陀

[拾遺] 拾は 丸 左 [illegible] 拾 り中 よ〜の山 拾 [illegible] 拾 と う 拾 許 [illegible]

芳のよ〜拾は作の右会あるを次は左の右拾と〜〜う

文芳

[拾遺] 拾の [illegible] 拾の [illegible] 拾 [illegible] 拾 [illegible] 拾

出張するを家よりかけて出るこゝろ

な　公よ　出るまい　祝の　氣も　あるこゝろす

市　の　使　宜　七　日　　　

句まうの人をまをまうえうの紀時みもあるすべきまえ
おの句人をまうの句、景をまの用まて人時をふかうえて
る時はその場へ垂直の付句とあるて名ひ入るまはおしもまへ
若かくてる字置りまうは達付時後といふ蕉門才一の注を
方樂句　姫　君　よ　さ　ゆ　ひ　義もうまつく
コハ義義を猶元のうふつきかつ振と見てうの用を付しとそ作
元の人はさもあるめと洛先時後といふ面風の服まて見る時々
思義義のうよく庭まてうるるまうまは時見えいの句もあ後す
る時は道雪えるん

とまうう　えくまの為ふくあり

狐　よくあ　乳　も　冥加日ま嘆　て

コハ為を狐ひの男と見てうの書の悩乳せぬ付とぞまこと
に謎こえ方を洛はくれの旅人と見て冥加日の若振ま洛め
る作をいひても猫雪元作思句面をうてとく時は考うつ人の
ゆふは冥加日とて打さるまうの付とゆ田れとまま為まてを
雪えうあるえ

猫ら猫のくせまとこへものて付て
悩　乳　えう　すの　姫ふは四ふる
れも狐狐ひの男ま悩乳せぬ嫁を姫の雪作付とぞ
句面りて見るに花は雪えて作うる振ま雪えて付れたしうあう
ひまえてかゝる付うの根さしは諸林の意延ふう歌
次は尾の寄川ふ考のもの狐ふまうの孫者ふまえかる意延を寄
て流破せしは支考あるまうの孫者ふまえかる意延を寄
ふ人の出来しはいうある因孫者やと悲泣せまうの後の人
人

□猫の句葉方

山川まは不雪の猫の句出るる時いつも雪こうるはらひまく
義雪嘆聳振作ふと付んは拙き限りえかるおはうのお句つ
猫拙をまう計不破くりから義振流方明石まうは吹上野

義ふはあうはやとうの猫をよくくえたてまえ夜まるうの人
うの用を付る時は一雪一点の雪ひまうよ度みてる野しき付句出
るえこの句ま祖翁は「東海尾の一節もふまざん人は風雅まふお
はつふきまはうんと宣へりまずて猫の付句は一雪ホまいくおも
出るまのあんばえりこの句を覚悟せえてるえふまはきまう
あり

和　夕日の猫を横まはうか　り　お
句を漱用の夕照と見て「列を乱す翁集の拙を考へ猫ふの
夕市のうえはひを付るうセアは考の猫ふ付考のきはこに暑き
庵

□雪まは地庵

七ア者

世雪まは猫ふ一句出る時は「の次はえや地庵粉成ふと云て英の句
振ふはかはらす有ま「洒仮元年吹芭蕉書」宋も考元まは付ると
変化とは作雪えうの人ふの句はふは句まくいふせえれは海句は
かろく変ある句を付ると変ふ句を思師せしは猫をく
はうは後句まかろきまふん仮令句面はうろくとも云うて切くは
付句はえうはとあれ句のはうの句はまうはうて強きまを三句強合
まれはうはまえ一句にてもやむまはむまもあうてうの産の時機産変え
雪まとて見むきまはにはうはまはうはえう俳諧は雪まはうは雪うを
雪げ強ケてうが中ま世情の産程をあうふまりえこの一大まは
を知る時は一者ことくく年まえ底まてるうの雪産ま宵く
まふく雪悪衰雪の月ま人を風流して人注の産を教ふるまえ
に不是はうまはしそもくく地庵とは雪出和注の体まかきう
ばはまてる曲蕉を雪くくる句を平生作の地の句まえかるまえ
たとは雪まてるまは世の後まうる時は雪しくは句へともうの雪は
る句まえて人うる時は老人の切産弁まえうるまふかく
対ばとくお句を見たるを地庵の雪方といへりかくて猫句まは雪
の和まおめてうの情をつくるまはうはくくは句まは地庵
くくは奥雪ざる時は曲を強けまうの奥雪まる時は地まは庵
庵はは雪句の作者、不奥の雪
有句あくくの句はえ
ま　雪句の雪を猫ら雪地の猫句を付る下

あの白の主を渡りて地の張面を作りて
山伏を切て落る関の方
落もたゝ山ハ高く
古社今本この付嶋を出るゝらひて或ハ深川を七アの中へい見さるを
山伏の白を蔦生渡物ひし〳〵流る瓦高く流れを高〳〵うせ
アに巧め〳〵ハ流人の相好ミるましい学ん編ういへりさて山伏の白ハ
阿宅の実の文句ま「昨日も山伏を切てかけて
いに大に叩くの人を思ま嶋すと兄ゝて実嶋〳〵の社に居金る潜穏の
詞を付〳〵りの張ハ嶋友道のあつまりおるを高ぶらんとアに巧きま
だ〳〵巧けて入長今実のあゝて山伏をかく殺せりアあハ社ゝ弥
と為をふるハして流られバ為会伝病あゝ落ゝを変ずる中
に一人の流人ありて云く我ハこれまりの実和通りて仍おへまら
人と為ふかゝる強〳〵き学り中高〳〵バ漢達ゝ大に叩きも流ゝ
き〳〵弥やと実嶋〳〵の会撫をおけるにの大に叩きも流ゝ
為ゝ〳〵ゝれハ一社ゝ〳〵めて戦ゝるゝを知ゝる張文実ゝ者
実の大ゝとふハ「力さ、ハ高〳〵ぬ世の中と流る時ハ白を知の
伝ま実ゝ者と為ゝ社を為る実地ま為て仮落伝をう〳〵ふハ、漢
強の廣方通きて為博物君に会ざるハ嶋を入を孫家風孫よりも
をうし長大を以て大を流伝といふ妙術文或人殺〳〵て曰く為シ
漢、字指会あ〳〵ハ妙何為曰「君にの〳〵ハ高〳〵ぬまの中トせん
再雑曰世の中も指会あ〳〵ハ妙何「三星の為古稲の伝ト云ト
に為へゝれハ雑者嶋て自立を寄〳〵ゝ為ぬ

夕日を空ゝ高ま金屏の照　支考
諸人と為る流の九すあア　南本
と為る本陰ま一樽の友　考
かくばうり兎も孤ゝ月淋て　木

此盗人ハ敬ゝのおに巧伝〳〵て池乃を何ふ独雷之この白清人
と為る説トいひ為ゝを立て横岳の情弱り〳〵り為に思〳〵き中り
白セハ〳〵の流人ハ女犯ゝんをこの作者の力を刺者を為る友道
の情と兄ゝ〳〵一樽ま為きを清せるハ有力のまさえ次ふハ〳〵の

池を目兄と兄立をあき清光の為を兎もへゝるく作ゝるハ又一
屋有力の曲詩文

立ま　風ま為をおくばふの打死　相楽
為ま　とりて朴の廣楽を引撓　中端
長出屋きの兄立ま立て抜面ハ為の相柄文
物造　実方の軍も屋ちまを〳〵　月　呂　山
ま　今宵八月十五夜　月　呂　山

時せま在さハ清寿愛弦の中ま今宵の月を強ゝ里ん和をと密義
の親ゝんと白面ゝろく云ゝて抑て哀深ゝいつ〳〵為軍ゝハ仮撓
ころぶ立昊作るとおのゝ強物ん〳〵ゝ名為のおしはゝるハ砂〳〵き
ゝ〳〵ふ

万端おいて小仮ま　白
楽ま　ゝ為ぬ長田ゝ〳〵ゝの言を振　支考
大立ゝ〳〵こ人楽ゝ　左時
ゝ為ぬゝ〳〵ゝ〳〵ゝ為て抜面の深新〳〵抜と兄て大立と作ゝ
白面ハ長ゝ生七

ソコ　あ　鶏　林　あ
チ　戎者一弱兄返る嶋の　鶏　沙雑
再ま覚物る浮土ゝの清　考
ハタ　伝云を抜ゝ何ゝ我を為ゝうて　寸　眼
チ　老淡のゝ　尾　張　大　根　乃　高
為の可云を尾の伝ゝ〳〵ゝに兄ゝ小田原為ゝの為ゝと抜面を
言ゝ伝云ま尾張大根を考せゝう為し〳〵ゝ為ゝ〳〵ゝまるに為
ハ我を為るゝ〳〵

裏〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

「白石の軽き食の軍」「敵討」「城攻」「ようかりてハかゝこゝにあるりけれと方食て白石にはりうまさに乗こし紀白まうゝ」「白用」

敵ハ捕ようと波ハ捕ようと波ハ捕ようと波

の物喘（レカミ）よと句作せしおうしみの余情を百孫の立史洞
たる必しあれハ爲なをいれて文修ゑ作られしう凡付句ハ現時より
名い多る時ハ変化自在ゑ作るものゝ掛方の法ゑるいふゝ雪現ゑ
あるべきゆゑ見ゑるゆゑ魂を燈ふハあ句を耳ゑ時てこゝ現ゑ
う現を立む弘句えいう所と硯くとも用りて其人の切ひを見る時ハ
称ゆるゆも行くむ是を付会の法ゆうさるを向書抱清書九清
あをは〳〵め流ゑ時えし許ゑまを氏付ハ翁も右るゆきゑ度此
を時〳〵れゝと皆後云ゑ多ひゆる有ゑ氏付味の時ゑ付ハ新
句翁の時を付と廣ゑゑ云ワ〳〵ハ俳の道にあといせ雅志ゑ名
て立るハ弱ゑ之文秀是を時りしゆ二句ふゝと見句ゑ見ゆゑ
「角芳殿の情以亀頻と芳句をお稽ゑう

ホ　性法　四　く　森　孫　野　中　嵐　雪
丁　軍　ゆ　ゆ　ゑ　よ　る　へ　き　枝　俳　翁
愛ゑ法人の掛を付ふハ弘句と為ゑんを見引近る切別と見て俳
枝を此しハ愛ゑ付の祝新ゆ〳〵む

押　法　る　所　ゑ　の　に　を　嗜　ひ　う　四　て　翁
テキク　庵　ゑ　庵　を　付　ゆ　て　此　す　ゑ　俳　ヤハ

愛ゑ愛の掛を考ふハ芳の時ゑ考ゑ時ゑ是を笠ゑ若宇掛枝是山雪
と見ゑて〳〵ゑ法ゑ

き　池　　新　霞　生　摘　ら　れ　く　る　和　名　ひ　イ　紙
衣　若　う　へ　四　ハ　と　る　き　美　四　孫　人
愛ゑふ運の云を考ゑハ弘ゑ和名ゑ和若の汗持てうるさ
きをいゑふゆゑ云ゑ〳〵ゑ法ゑ

ヒテ　本　賀　洞　り　い　不　弛　ゑ　ま　す　る　め　誰
入　る　新　ル　和　き　ゑ　ハ　ゑ　の　用　ソラ
あいに不見のこうう紀掛の情を付ゆるハ弘人本賀のふ弛ゑ考
世宮蕉と見持ゑの洞ゑ時を考へて風素の法を付ゑう掛方ハ
除く掛う法四ハ弘く蕉ゑ和ゑ

タテ　何　有　ゑ　人　の　隆　ゑ　と　め　を　下　て　嵐　雪
猛　ゑ　法　ゑ　庵　ま　ハ　翻　の　演　焼　嘘　山

愛ゑ困懐の素ハ弘ゑゑ法者何ゆの用ゑと考へて婚法の供
と見ゑ史振迫を法四し美を今〳〵ゑ法ゑ者を忍ひて為法の掛

を見せるハ世ゑ衰ゑ

ホ　今　ハ　後　き　し　今　川　野　孫　ラン
稀ゑ　四　く　後　撰　の　風　を　通　れ　し　許　六
愛ゑ法人盥裏の情を若ハ何を付ても為の嘘ゑ紋孫の子孫何
ゑるこゝろさ〳〵ゑやと考へ古ゑ後入ゑるも法ゑる和考の達人
を法ゑるハ作者の伝力ゑ

フリ　法ゑて考ゑ素も教ゑかうて　涼ト
愛ゑ亜庵を考ゑハ弘ゑ素を法ゑて考ゑハ十人　蕉右
名言き是と見たて法て考ゑとハ与人数の掛あんハ看病ゑ集ゑ
たる山人を法四〳〵て見ゑ是ゑ作ゑ〳〵ア翁の十法弘〳〵て孫ゑ音
今氏法を進ゑ法ゑ

セア省
□一句立の法
句た蕉ゑハ年所生考の洞ゑれハ大方の人皆或ハ一句立ゑ法ゑるひ
ハすゑ〳〵たゑと云ゑ感ゑ句ゑ氏付ゑ考ゑ蕉の書の曲蕉に行ゑ元考
句ゑ考ゑ法ゑ地ゑ考ゑ法ゑて法句ゑ法四の掛掛を法ゑ〳〵て付ゑ
ゑ〳〵法句ゑ会ゑゑ掛を考ゑ句ふゑ〳〵ゑ法ゑハ一句たゑぬ
句と考ゑきハよゑ法ゑゑ〳〵き付句ゑ

ホ　庵　人　の　ま　分　化　り　る　猩　奏　て　ふ　六
考句考の猩奏法ゑゑ法ゑて分時て考ゑ会ゑ法ゑ
喰ゑらゑめゑむと必ゑ作と見たて法ゑ〳〵猩を奏て
せ〳〵人を付ゑゑゑ氏庵人理数考ゑ法ゑて考ゑ法ゑ〳〵ゑ
へちゑつと考ゑ用法ゑと云ひ〳〵河を猩ゑゑゑゑゑゑゑ〳〵ゑと
時ゑ考ゑ法ハ法地ゑと考ゑゑゑハ一紀法へ考ゑ是ゑ氏句ゑ〳〵庵人
の書分時て考ゑハ大ゑ庵ゑ料理人ゑて凡ゑ訓業の考ゑ法ゑて
一句たつゑゑ是ゑ書分と云ハ考句ゑ法ゑ考ゑたらゑゑ〳〵ん法河の時
を考ゑ新法ゑ

稽山　　童　ゑ　法　る　奴　ル　ゑ　ゑ　と　も　者　ゑ　考　て　丹　池
一　考　の　考　ゑ　ゑ　ゑ

れむ者白はかくぐと云詞の音うおき有る俗白の白の食物
とふりてうられ合かくめてとく含ミて作るハ家情を除むふ
ためふりまの詞を天武川の後しまてあ月の僕の呼れし情
を掃写したり

三匹　我一人云きてあれ　金森　ゆ　森ておきたら行せんと金的しるを記ハおき
さきとゆきよろ〳〵としてゐる拙と見立てかく付〳〵式云和
白の中まあきあるすゝ〳〵白

天宗　ゆ　はいてうはる　分　お　井筒

二日　月　ゆ　うの　度　程　と　いひて　せるるうら　見通
白ところ金ゆ〳〵ぬ　ゆ　女房の　美見せし作と見たて、かく付
うの度程の和拙おまふ〳〵

タソ　山も　笠　為て　美日　牡の　秋　巴分
芽　猪　ま　長ひあう　てハあ〳〵ぬ之　鈴　技
白ニ笠山の名ま猪〳〵てゐめ山牡まいうあ〳〵ハ笠きる広詞
と見立て其拙ひを芽猪と拙詞〳〵ゐ「芽猪〳〵ま笠ゐふ〳〵てもな
らぬと作るへきを芽ノ字ま笠をふくまて見ハ作るハゐのこけ
猪ま白く人を作ゐうらぬ和拙ま和せ笠為ゐト答〳〵為ま芽ゐる
笠をふでい松茸の芽ま為〳〵芽ハふうていハと云ひあ〳〵笑する
拙を見せんゐあふり笠ハ時ハ見ま上の作と成る是広時ハかくる猪
響とあるとまと名人との境うく拙ことゝ但し余の猪あゐハ是
宝一白立す

タソ　一にまいへいころ河れ　八百目　技　会
白　そちらへ〳〵ても　芽ハ　鈴　長　鈴　技
白を後時の詞と見て鈴長と作るう鈴長広詞八百目へう
るせうあれとも然らす　芽を八百目の宮宗と見ゐ時
「そちらへ〳〵ても」これハあんゐハ共人ハ十メ目の
ひ元る歯あきと八百目の意ても弄ふといふまあゐ之さ和
鈴長ゐまうて十メ目の横ゐすくきを八百目ま作ゐれ
い横ハかゐゐれと一にまいへいハ八百目といふゐ
おあ〳〵ゐ広ゐまゐ時四ゐえまり「そちらへ〳〵ても」広詞二度か

かる用ゐれハおへゐゐれを〳〵て一白へ〳〵つえ

白名　鈴の日の後ま見の時ゐ以て　長平
白見方ゐう本ゐる後の後ま見立方へ作る拙和
む拙と見たてゐの後雇人まて其明ゐ為ぬ有ま和
ざ山白まで拙詞用方ハ和ゐられハと拙くゐ拙のはお
れハゐ〳〵ぬはゐ白ゐおへゐゐ白

寄　十　鈴　といひ歌殼ま意垂　風　美
白　一　白　ま　て　伯父　ル　寛　ロ　意　二
白和謙歌ゐる拙伯父の美元をおゐる詞と見〳〵〳〵かく
はは〳〵ゐ見一白広ハ丸て芽ゐまあゐんゐるはれ変化ある
有ま〳〵られまえゐ一白後広ゐハお白ゐくてゐ時男詞
あれハ之この歌の白謙ハ謙ま　□　係はと考て年〳〵ゐ
り又変横白の中まこの八伯ま白〳〵き作ゐ元お白の意を
返〳〵て後宝を云ゐゐハ情の詞まて作てゐゐの中まゐゐた
〳〵ゐえい白と芽ゐ白白てゐ芽白の時をゐの作ゐうゐ〳〵ゐ
白ハ白白の法ま時後ま〳〵て情の詞を出ゐゐを作但しき
芽の作を能せ〳〵人ハ者といへとれき角本因支考漆莞和
ゐまゐ白きま

○此因ま芝髭の法を評す

ソコ　掃除ききいま　ち　お　養　ゐ　滋味
雑　ゐ　出て　あけハ　ゐ　ま　き　を　芝　ゐ　支考
此白ヨシ　雑　ま　の　山　養　を　芝　ゐ　後　化
此白アシ　掃除雑ノ　是　東京坊一生の誤ゐ之と漆莞ハおこまて評せ
二白ヲ考　〳〵ゐまこと　ま　後ゐる　ま　〳〵漆莞ハいこまの養ゐまて
雑を害せん　といふ不緒の雑ゐ本生
〳〵ゐまゐ〳〵れと作れをと芝〳〵ゐふて
てゐ出氣の雑後ゐ御後ゐハ人の拙中ま詞をゐ〳〵入きく
後後光後を後ゐて〳〵むきゐの後ゐ時ゐハ人の後ゐ
雑ロサビ　此ハ芝白の後を時ゐさば〳〵て後会ゐて明ゐと云
二白ヲ考

仕方なりとなる一生の曲あきいきを筋之

▲山蓑の句は全く句の味を強ひて面むきと自ら明るとく決してすぐれ句之雅の深云は謝よ蕉り書〜深意いかきを評せしや為ル山蓑の評ハ一生殆仕技じと蕉はきしもいとよ

言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外

言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外

言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外　言外

孫と　おらす　爲日の　祝　ソラ
有名の　友　うと　後をふり　返　川あ
詞　註　する　永の　雲　会い　一　栄

その　祝たきい　他　ヨ　て　尾　位の　俳と　天　てうの　辺　をうき　とる
ちゃすす　面うすぎる　有名の　友を　俗の　ちび　小　ま　ふ　ふ　ふ
たう　付け　ふり　次い　ふう　ふう　る人を　旅ま　久　く　すむ人の　有名
の人ま　旅ま　て　ま　ひ　る　ま　面と　天　て　雲　会の人の　ふ　泥　喧　嘩　を
ま　う　ふり　久　ま　ま　面い　似　て　も　を　張　う　う　う　但　詞　註の　句
い　選　付　文

ぱ　む　ら　く　と　ひ　ら　く　今　移　風
あの　男　や　ら　し　と　を　立　室　油　老
強　河の　田　植　四　ま　て　頃　く　ラ

今　ひ　ら　く　を　人　を　上　る　ま　面　と　天　て　立　ふ　ぐ　と　付　け　次　ま　い　あ
の　男　と　い　ふ　を　天　為　ら　ぬ　様　人　と　天　て　室　ぐ　の　田　を　田　う　表　の　さ　れ　る
と　し　た　り　お　の　た　ち　ふ　さ　ぐ　と　い　ふ　詞　後　句　へ　「　」　う　る　四　表　り
ま　る　の　ま　風　俗　の　姿　を　――　強　う　り　り　「　ま　し　女　達　の　ふ　す　る　表
性　「　田　植　時　ま　い　ま　し　如　何　な　る　ま　あ　と　ま　情　う　の　用　を　つ　く　ら　い　廉　と
あ　む

三月　演　の　わ　俳　の　ま　ま　日　表　み　曲　ぶ
習　い　ま　と　仮　作　ふ　え　雪　訓　て　庵　え
面　ま　深　し　い　篇　様　す　る　紙　表

おい　演　の　る　俳　の　箇　あ　い　ま　と　ま　の　ま　ま　ど　表　の　箇
れ　う　広　付　ま　る　を　次　ま　い　仮　作　ま　の　ま　を　雪　訓
ど　雪　ま　れ　て　咲　お　見　え　う　広　て　作　ま　ま　ま　ま　て　い　仮
作　ま　の　者　を　ま　い　ざ　し　面　の　笠　す　紀　作　て　か　る　ま　の　箇　を　ま　ぶ
る　さ　ま　と　笠　を　中　ま　し　て　左　右　ま　う　雪　く　す　ま　ま　天　四　れ　ど　ま　ら　す
こ　れ　雪　ま　表　ま　表　ん　流　ま　お　日　く　ま　し　さ　き　い　こ　ま　表　す

□　俳　四　の　註

[古今二] 俳諧いろの句なるの句の姿情を分けて為句云ふ云ふ句こそ変りけむを付る四名に一字一名のてには多くい附合の俳四ふ

雪人のお球を去りむいは付方の変化をあらさる四名ふり
者しの俳諧いはれ所ん今お俳諧わお球しをつて
うすせ　ひふい人の付けたる後をみけけんとる変化
▲　世一癖　註　ありあるひい球ま宗　脚　体　等の句あるる時
宗　記　の付い球より足るとて許らさずかるわい書き和を
付けて天時の変といへり或い増こ句並べる次へ歩切
体を付くるまを名を球をあり
天　く　す　て　そ　の　庵　う　う　の　庵　ま　え　り　付　い　て　付　け　る　庵
ま　球　ま　り　天　る　ま　る　時　く　ま　る　後　を　付　け　る　句　あ　く　ま　る　俳
付　付　け　る　い　人　の　付　け　る　後　句　体　の　場　句　を　百　並　ぶ　ま　る　句　こ
者　の　情　を　特　て　切　け　ば　仮　令　日　体　の　場　句　を　百　並　ぶ　ま　る　句　こ
の　ん　雪　泥　の　ま　ひ　あ　り　て　球　す　べ　き　程　い　高　ル　ふ　し
指　北　四　と　い　ま　の　運　ま　て　和　栖　ふ　し　た　と　へ　ば　山　海　の　美　者　を　刺
て　み　彩　を　分　つ　ま　る　風　味　ひ　と　し　き　と　紀　を　一　擬　ま　あ　紀　後　日　ま
疑　一　句　を　り　て　あ　付　ま　ま　る　百　場　の　場　場　美　ま　る　ま　た　い　場　風　四　日
時　く　ま　ま　ら　た　ま　し　ま　り　き　を　一　を　て　変　ふ　し　ま　る　人　い　美　金
ま　時　ま　る　ま　付　程　ま　ま　ま　ま　を　ま　ま　け　ま　る　ま　い　ま　る　ひ　ま　ま
ず

え　も　く　と　様　い　へ　の　ま　ま　池　変　文　秀
三四　戻　う　ま　ま　ろ　と　い　う　て　喧　つ　き　友　来
こ　ち　う　ら　い　ま　う　天　て　ま　笠　球　行　産
今　の　人　い　笠　球　ま　り　池　変　が　天　白　と　場　ま　ふ　ん　は　池　う　う　い　昨　日
も　ま　ひ　し　ま　様　ま　面　様　戸　が　り　て　ま　ま　り　し　を　け　ふ　も　笠　ま　る　又
ま　ま　う　ま　ま　ま　て　雪　を　つ　く　ま　と　ふ　付　ま　る　を　次　い　頃　る　人
を　天　う　け　て　か　く　い　ふ　詞　と　天　た　て　変　雪　を　付　け　た　う　の　は　じ　め
い　れ　て　ま　あ　ひ　先　つ　こ　ち　ら　へ　と　引　き　山　し　を　相　み　の　み　投　ま　し　て
い　ま　し　ま　れ　い　ち　う　ま　ま　ま　つ　て　ま　ん　か　ま　し　ば　と　弱　し　あ　ら　天　方
に　て　孫　い　ま　れ　ま　い　ま　れ　も　ば　天　付　け　ら　き　ま　ば　と　向　側　を　新　ふ
て　う　る　を　笠　の　四　ま　う　天　て　戻　り　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
る　ま　長　脊　あ　う　向　て　通　ま　て　も　紀　が　初　き　て　あ　る　ま　作　ま　て　山　ま
ま　笑　ふ　四　ま　り　笠　の　一　ま　て　碑　の　さ　四　変　の　指　ま　う　ま　天　池　う

こゝろうる通らぬ振をいふなり通る振とうち膝をまゝ流のちぐひ
あり

一ツ家の門者見はらす宮門　河人
詞　綱の人を　嵯を　食　時　於　桃　者
てらくの面もさゝ〳〵とよい天氣　嵯　者

一ツあの時けふ話ちくるい農夫時と云て綱人を嵯ぶと云ふるハ
其作を他ようる者を次を次ハはるけを引きてよぶ人の自白と
見くるのはの天氣を綱人と嵯す振をなるりいうはさんさくしてい
云ふ面を見る氣をひふし

はくしゝ本瓜　瓜はてり　流を新　左次
絵　其の社のやたらみいろき河　宮　巴丈
三　俵つけて左の　絵　おと　宮川

野流ることふを庚社と見立て面ふ河岸よりの場を宮め次ま
いうの河岸を掛屋と見て市いづるをけけうおい摩社の脚
流ハ徒来の用文この見本瓜の下を通る振あ〳〵此彩もセ中ま
与き所ま愛ま略す

□月作か作の作之白てでくすを見るう他猫ハ面月ま
疫を去りて注するものとおば云ふるうをり〳〵廣人の
記を嵯くまを箱の時ましい去きらひも微細ま家けうけ
ふどいふものあゝ去猫ひりて変化とするハ異人のあり
差〳〵人あて月作ばうりうお作もうりかまて百白猫ま
いはばいうまハ在き変化をあ〳〵白白まハあゝでなれう
ひるるをそうし

破戸ま行灯　対　残人
底ハさび〳〵　き麦のひき割　翁
ある　月作　七ツ〻キ
茶ふくて　張　紙　ま包む場　鏡　人
　　ねる　神ま　の和云　翁
人去ていまる　嵯　廣の白ひ名　人
　　和せまこ　ともるきう　片隅　翁
時者　箱のあるい　宮　中ま　人

去んまく〳〵ま　ふい雲ま為業系　翁
吹ちげらる　、美の者　お　嵐者
河る　鬼河〳〵　ぬ　鬼ま　さと立て　、
七えう山　を立てかゝる月　翁
月作　栗の　の　為たる　砂　猫　、
高　嵐　く　ふく　たまる　ま　面　者
坊主ま　老　ま　ま　いはず　匠立て　翁
土の鈴つ　く　神ま　馬〳〵　、
七　毎に　鐵つく　猫　ま　と　ふう　者
月　著て　残る　松ま　切　是　翁
注

□自他の注
是世自白之白　積ま　広コヲ　諸者　まもいだ〳〵　者ま　ま云へ　りうれ
等のまいを　ま　要化　不自在の人の云ひいだせ〳〵　ひが云あり
おまう自他ようふ白ぞちらくまはけどう自白ときいまり
たる白に他白ハ決〳〵て付かだ自他のおあ紀ものあり　られま
云のまを　ふ　者ま　て他　落　ゝ　かぎらぬまぶ　ふ　望を
要化とて自他ちがひ白を付ける　紀ハ付白ハ顔ん〳〵　ふあり
てさらま　ま　え　ぬ白と　ま　ふ又他白ま他白をうきぬる時ハ二白の
あひばま　就　ま　ま　ま

駄　百姓の息子う猫の名も知らで　蕉日

　　元禄と和尚は喰いせ西きあり　田之

といふい息子と和尚と向合られど同の仕にハ向合ハず方後

ともに他ようなる人の詞りて作ようを作者の地に詞ハ蕉を

りて其移を忘れ〻

□蕉方禁句の赤

芋句を画。元禄句。秋云。貨句。蕉句。嘲。奇。出句。ナトハ元ろつ

るの次〻てあるまゝ〻くるハ何ようてもかく見〻れぬ句ハおき有

ありの例ハ一堂一点ようるなりて獨句ようて獨句ようて余句まで見るむづべ〻ける

て変化さするものあるまゝめあるゝ句〻めあるゝ句〻方あるん程あ〻

又「素丸出画の詞ようる点の付「蕉本書歌を人作ようおこすと云

ふ徒こ付「名ようよ旅人と呼りて坊くく付方「呼ろの婦ろの婦の延

と云ふ「呼ろの人句を変むハ「熊蕉人時ようる光源時刻蕉

の付「山川の婦ようる歌の詞を変〻べて会秋付ハ句ハ句ちがひ軍

るの次ようる鉄食軍語の付ようる「詞作の内会付蕉ろりこの蕉こを

点徒の下るの立まりいで〻付けるを翁打ち破〻多ひ

て中孫ようる句を蕉世おべて拙く有りて再発〻〻る樊

ろりこのお「こ句一点「与奪「こ句の変「古ろ侍蕉のころハ

連ひ「芋句の変ひ句のまどひ「掃象「蕉句「一頭「去歌出

芋句ヶ蕉の人ハ連ひ中ハより発りてせさらるろの号絶

を絶るものもあれてもセア蕉人孫ようの変ひを絶きろう

俗句に蕉る数俗ハ拙ふ句の蕉を句ようるつるハ句

の付けより一変接と云ふるを絶くせべる蕉の去似て元

るべきるようます

△芋句を画と元立てけるハ

　　涼き の不二ハ湯茶ようる　蕉の　一瓢　キ角

ある

　　を　とさ〻〻〻る　芋句

涼き の湯茶ハヲ不二の茶句と元て床の話をとなけ〻〻ハ

涼きと云湯茶と云ふ詞ようる時ハ画トハ元らんば俗〻かゝる

付ハ芋句ようりてもふ〻ひせバ繋〻〻くあ〻んハ一時一興と

ころ句ようる訪る絶ようでお句の変れ之因〻付ようる気写

句を猶ようる云ふむハ拙き限りと

△芋句を元句と元立てけひる俗

　　鉢さんの大さみろハヲ強接の作句と元て市人のあ元通〻〻〻接を付〻〻

　　風ようる吹きてうるる市人　翁

大さみろハヲ強接の作句と元て市人のあ元通〻〻〻接を付〻〻

元流ハ一斗入ようる大ようるハおしさるを云ハ元ようる句と元立

ようきハ長之一度一興の曲芸と

△芋句を寿と元立てけるる俗

本出　蓬の　柵　木ようる　寿をあらめて

　　芋句蕉国集の偏出ようる句ようかく付〻〻〻若蕉の柵とあらハ翁

さハ元たてらんまゝ〻さんハ芋風月の絶ある句を云ふ寿と

元んるようおおばつらおゝ

拙　松　盃　の　月　人

　　ひ　ま　つ　と　〻〻て　寿　芋句を云〻〻〻　随句

芋句松盃の月〻〻とくり返〻〻寿を蕉する接ト元立松盃

の月といふセりようおゝてあり〻と付〻〻

　　秋　あ　を　ち　と　和　ら　け　て　秋　の　あ　去仲

　　祝　父　の　寿　ようる　誰　も　ま　ひ　ら　ぬ　宇中

シウス井を秋の句と和けるようて詩の接句寿句詞と元て人

りて其寿ようる拙を付〻〻句ハ三句ようる寿の一作の歌ようハ

俗の一興ようけむ

△芋句を蕉と元立てけるる俗

　　故の　つ　ま　ま　二　和　森　ようる　蕉　ソラ

　　かき　消　る　蕉　い　拙　中　の　地　蕉　て　呂　丸

森ようる句ハヲ森タワイハ句ようる呼ようる歌のつま二和森タワイハハ

故を何ふ人の岩森の句蕉ト元てろの蕉句ようし歌句の作を付

〻〻歌のつゝみに歌集などい所ハ昔あるて現ハいかゝしと思てある
あ一時一奥おりけ白りり「春るおりとあゝバ昔ハ思てり昔ま
しこの後いいかゞどおもはあひ入るとも昔とこゝろをも
糟糠おゝむかゝるるハ一白ハて出るりの所「ゆの昔目の歌ゝも注
〻たり

△おもの名歌を人ゝ見ゝてけるる俗

狸ゝ者さら殺うさせむ小殺

書物　友達の吳名の中ゝ勢を失るゝ

殺を解役者と見て狸をイ名ゝ云うあゝゝるりすぐてゝいる

見立ハ□□係ゝゝ作るりのありそゝ〻〻ゝ昔ゝゝゝゝ

不易流行あゝゝれ名ハ流行中の流行ゝまで一白止白注

りり

△里ゝゝゝ飲食の付けゝる俗

茶屋　辭一人を茶弐者の中　仙角

酒をのむゝ計出す孫のあゝゝる　千声

竜井片器イセ駿河ハ大食する中ゝ辭のゝ食あるを見ゝく

おとろく孫あゝゝれゝ一時一奥のおゝゝみあゝゝ丈でかゝる

梦あの取作を見ゝやゝゝてゝ作者のゝきたゝく受ゝゝ

○諸変格

此巻ゝ巻ゝる変格ハおゝこの巻の注白の上ゝ○とかゝあるハハ△

駅下ゝ曲変変格とゝゝるとハ所ゝて格おゝ中の格おゝゝんハ注

とゝてかゝゝ注ゝ注ゝゝき変俗あゝゝさらハ変ゝ巻ゝ巻げ注ゝ

よかゝるゝんと後世ゝゝ古俗をさゝる人あゝて丈巻を手ゝ見

為ゝゝと名い拾遺ゝて混雑せハゝゝゝ初ゝのゝゝゝゝゝ

んと者ゝてかゝハゝゝたり学者ゝ正格と変格と又変格の変

格ゝるゝとゝ時のおを知て百世ゝ人を防ぎむゝさる為夢

あゝハ又文ゝ変格をおゝゝゝ何の恐きゝ防ゝん昔ゝ巻の大宗所

ゝるゝゝ

□一説ゝ巻ゝ本紙ゝ一本紙ゝ

茶の酒とゝゝゝゝゝ　七巻

茶屋　酒ゝ衣ゝ巻ゝ巻ゝゝゝゝ　文考

方仙　初　酒ゝ衣ゝ巻ゝゝゝゝゝゝゝゝ　文考

言笑ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行て茶白よりはじめて高をいざしらやぜむとうしろめたくおもはるゝ

俳　花せうの苟鶴の茶　あやうよ　酒巻

此一説ハ元禄七浪花なる天満宮の巻之十哲この法を出ふハざるハ俗の世用迄持の説よて正説なるべしぬ成ゆゑ考此時法技して茶の本意をよく知り名れハ若しも後世この度俳諧を拙としてすぐふ人なるべしんうと 古今二 よあやうき〻しの詞ハ古物も故孔の俗語名れい正説の法ハ及バざらんとおぼしるひるハ 平安 の際相の茶ゆゑ正説なるべしめむ茶湯の切文故式の従容まて茶の本意なるべしなる正説なる酒あるも茶の法ハ元禄十六浪花の天満宮の天満宮を思りて百万仙を撰べり紹鷗ハ

一ノマキ　雅　狂　効のもつてかきあるる説うつを　天満

オナ、　知る人ハ説説やうに若ろひく、

オナ、　人の気をすきとるる茶の法ハ　一茶

オ十一、　茶の法ハ用ひるり

十六、　法やうよ古月上るる衣裳　江天

二ノマキ　ホ　ホ　ホ

けて又種子をづけるまざとも
雜もをけて多種雜よほあるむとい先うの付句を守うぬ先より
其作者の類の四がみすちりてゆ
知られていとなきまくおぼ四文種こ屬いらく蹄ゑん元今
の風ゑ其嶋おいめそ

△花を淫ゑまきすきる

新　ちるといる淫ゑの　暗　匂ひ今ゑ　キ有
江戸　芳を考い今ゑ有る去飛の　匂ひあり　一演
月といハ如月ハ所れとる花といゑ花といゑ花ゑいゑ
あるに言考言其角弟ゑハ水去才一ゑ挽ちの分とゝて行有
正ゑゑ有ゑるゑ長蹄ゑの正ゑるむ

△ゑを考むまゑ考ゑ

梅山　ゑゑとゝいおものいいすさきい　淫村
ゑて百句考て　百　句　りゆ
かも　数百形　非の考ゑゑ考ゑ　酷笑
ゑ　ものゑも人のこゝろも　ま
吉日　魔毒ゑ考てゑふゝぬ　ゑ　花　坊ゑゝ　麦士
ゑ考　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ま

支考一作の中ゝく三ゑゝ論ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　

六行　ハ　ア　ハ　ア　ハ　ア

直　ヲ自張の跡ゑ自奏およりせて　相撲
素あるて　暘や自奏ろ乃きる可一す　菊
宮居し

俤ゑ矢拳元奏の此文自奏ハ奏あんとも素名ゑて八冬より
出れい実素ちる庭ゑ氏此ありうるも菊季とおうさき庭
ゑ旅あい宮居〳〵と暘れ〳〵を再拵ゑ暘と直さんゑうコハ
一時一奥あんハ俤と〳〵ゑ〳〵し強ゑ自白の中ゑて一白接ゑ
〳〵なるハ素怪〳〵冬出奏絡るゑうゑ〳〵し強ゑ自白の中ゑて一白接ゑ
ハありこの余古集ゑ世俤庭の和を秋ゑい〳〵秋のゑを奏
ゑ入る新今ゑとそい或の冬直ゑて裏接あ〳〵庭
ヲ鞠つゑ新素ゑふき苔蜜きて　庭士
ひさ　夕〳〵の月ゑ業　業飯ろきかす　然雑
業飯ハ冬奏の月あんとも古集雑〳〵季ゑつきても用ひゑる
俤おし氏月後ゑ季あゑんバ芳ゑ遊て冬とあんとふさゝび
する可みあ〳〵す

△ス奏百白ゑ雨変接
雪を見て参ふゑ今白二ツゑよ　フ紅
拍　白素
所〳〵て庄の〳〵狭き君の町　ハ白
雑八奏〳〵てうる上方の実　フ
腿ゑ俤遅れハ小殿　原白
うら〳〵ゑの秋　脇の秋　ハ白
猶の猶を　すくふ為合　オ九
猶奏の結和さゑ奏　好尾　菊雪
雑　あく〳〵ゑ携やる才ゑ　誉白　波多
人ロそく〳〵ゑる名ハ水俤て　青井
松とる沈の月ハ汚きゑ

百白ゑ二ハ俤あんとも二ハ和ゑあ方あるすきる可　紙　仙尾
△カ仙ス奏ス秋ゑ方あるすきる可　雑　風
一接　あく俤き芯月ゑ雪ゑ　ゑ
ゑを直て冬の雑を接をる弧　陸風

荻ふむ壱池あるやうき　庭
秋　せうき古女ゑ髪を生させて　風
ス　ゑ　ゑ　ゑ

て重の格ハ重きわた

△一巻一のわを二三用る百変格

ナム 百句　　夢書の画ゑ似て清き花の小菜畑　夏仙
百句　　夢ゑ流て　　百　萩花の挿抜ゑ尽て黄ハ丈　　星風　汁丹

黄　　白
一百句　　ちつくや巻ゑ為て為る菜　　翁
白　　白
ねぶ　　あぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　杉風
福山　百句　　蓋　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　陳川
蓋　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　ぶ　　何悦

重かハりても菜格の苔おるんハ日しるゑ
百句　　重格の本菜　　ものつくるこち　　支考
高菜　　為菜ゑ尾のすくる　　百句　　為菜ゑ為菜重を久て　　狂古
はらく　と　　為菜ゑ為菜ゑ百の清ゑて　　逸正
古武ゑ為菜重を久て　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ
百句　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ
施布　　百の香ゑこよきく　　柳う布　　雲山
柳　　積の香の香　　柳　　野　　尾　　重

蓋句の句あれとも日しきゑ
ヤワ百句　　蓋の　　蓋　　小松の　　中　　て　　天る日ハ暖ゑ　　宇中
蓋　　小松の　　中　　ゑ　　蓋を　　守く　　云侍
トテ　　ヒハリ　　花さうやさてころ　　重　　者為ゑ　　重毛
ヒハリ　　重　　雀とん　　雀ちゃ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　鬼丈
松高　　隠　　汐干の汐を　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　翁
松高　　隠　　隠まへとてう　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　独
隠　　隠を　　ゑれて　　猶ゑ　　ゑする　　楊布
キク十　　猶を　　おゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　朴人

□表ゑ惜む和を用る変格

客東　コヒ　六　　頭　婦を　　菜の　　惜ゑうる　　キ角
百力仙　三　　ゑ　ゑる人を　　為ゑ　　云ゑ　　ゑ　　天菜
ゑ　ゑ　四　　七。えう　　山を　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　翁

白野　　江戸見てくまバ見男　　二笠
サル田　五　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　史邦
　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ　　ゑ

の百名種星も神奇ヨ限らぬハ神祇ヨ
あり
ム ありやおゝや名こそ人こそ鶯月 百何
天日 尺 仏の嶋も 天ヨ 去う 掬 蔦字
ム 和のむや名をうへてきく 蔦物 蔦物
みあ 尺 池 庭 静うた南風更 お宗 眼 孫
垂花の白ヨ垂花の猫天の白ヨ天の猫いよ〳〵猫ハ不白を新
とろ〳〵あゝむ

□稲面去変物

アナ 稲 資 人の 猫 を 給きや る 翁
空きク 国を 穂 ぬ を 江の 猫 の 尻 来 い
古武ハ云ク て三あれハ 打去位のあゝ ぬあゝむけるし「苗の尻赤ヲ猫
の尻赤と宮深せしよあゝすや

△本歌茶話伝三篇

一次戸 山 鹿 小 栄 の 陰 ヨ さつと 吹 仏 妻
去ら 寒 うろき さ あ ヨ ぬ く ひ 、
ホコレ 俳 沙き 庵 ヨ 変 り ヨ 猫 さ く 翁
ミの へ ち ち 美 垣 種 ヨ 赤 瓜 も 赤 き 京 瓜 栗 地 一 晶
ホ三 笠 面 出 や 和 の 実 村 き り 翁
ちる 宮 者 ヨ 猫 を 払 ふ ら む 祀 力
仰 月 ル 名 孫 の 言 き き 蔦 室 風
笠三 嫁 う 星 や 清 ヨ 種 葵 の 生 蔦 う 風 美
白 嫁 文 う き ち ら 作 庭 の 庭 の こ せ を は 作 子
振 松 苗 移 暖 の ほ の あ く 雪 キ 角
池 の 橋 活 〳〵 始 ぬ 地 四 ひ て 岩 雪
振コレ 湊 入 る 帆 の 足 四 る 赤 根 孫

□人作孫

地百 ろ つ き の 赤 紀 女 房 の 新 き き 仏 あ
教 す ら ら 姫 〳〵 す 山 体 の 髮 翁
為 皇 ヨ ヨ 始 め て 美 雞 ま り る
聲 蓮 ヨ ひ 酪 の 芳 歯 ヨ 面 ま れ て ぶ ろ

慈 源 鯰 の 汁 ヨ 比 喜 ま と ハ 史 京
夕 さ れ ハ 祝 に へ と ふ く 神 乐 笹 角
ち さ ら ふ る ひ の 山 を 見 鯉 お
孔 明 の 力 星 ふ り 庵 り 庵 お 京
稲 ル 伯 父 ち 鬼 と 人 実 の 掬 臨 見
深 世 ら ら う き よ へ ま び く 凡 中 物
江戸 方 丈 を ふ て い と し よ ふ 雪

△ 孫 残

こ れ 指 ち ち 米 鞠 ハ 乳 巻 ひ ま 蓋 二 り 雪
ま 十 る 士 も 一 む い ま 新 自
む く ら 〳〵 明 日 の 天 京 を 交 合 て 泊 風
為 代 ヨ ま れ ハ 俳 ル 乳 巻 地 新 ハ
山カタ 巻 第 ヨ 行 や ら ら ふ ハ 祀 会 自 社
孫 ヨ 拝 へ ハ 孫 ル ま め ヨ ま る 赤 翁

△人。者 残

貯 考 ル 孫 て の 踏 を せ ぬ 人 格 樹
金孫 唐 家 の き れ い ハ 二 陪 を 一 陪 業 頭
拳 陪 ま る 西 瓜 人 蓋 天 樹
る の ま を 飛 御 う 者 も う ろ 覚 り ま
蓋 業 鐘 た ら て 業 ま ん ま る 米 ま
出 房 〳〵 て お ち や る 月 兄 ハ う さ ん 者 為 丁

□天盃 残

戸 唐 日 月 る 呼 孫 る 演 の 釣 や け サ 盃
仏 陪 の 荒 ヨ 鯉 ル つ 巻 ぬ や ら 史 庭
為 て 日 ま ら く 兄 四 る 小 田 京 キ 樹
日 い 釣 〳〵 為 代 の 釣 森 此 〳〵 れ て 碧 永
孫 と こ の 仮 ら 新 ル も 覚 え す 梨 月
ま の 年 ヨ 浪 位 ル 房 ま ん 友 陪 ま
ま き ら 〳〵 と 星 こ ッ ミ ッ て 了 何
用 歴 の 松 ル 拳 て す て 堀 の 志 仲 右
孫 ル 多 呼 て 日 ハ ま い め ま り
△日 蓋 釈 分 残

山カタ
日ヨ日並
尼達ハ矢背の麦仮喰習ひ　右筆
延おゐる子のよこさ日のてる　独就
ちも今引すて此の三日の月　若き
をう点の夕うて仕会　紫屋仙
石カ仙
数日並
和泉　をよ〳〵と又七日　支考
野石
秋分
行を出ひの灯籠文ゆく　及集
みのの指子もぬけて星々　庵庭
みふ〳〵その一秋風
△宿相撲
吹雪の袖をふるふ見才　翁
松岳
言泉
松作の冥加を実む色の市　松
磨き　きく〳〵る暁の霜
寒流て机の先の蕨すゝき　朱
秋室　ふりて人も寒しき　角
野白
寒白
ちよもさう村ゐもれて暑の月　考
△鶯初哉
ゐ庭古巣弘くをさすて　仙風
白き巣より赤い爲のほの〳〵と　ちめ
巣冥より赤い爲　也代
巣
さゝ巣
巣るの日ハ雑も天寒の寒るやう　コ秋
巣るいすを初らすつき淫　キシ
やれそこそ西ハ法能をの巣　花学
寒のくもりよ紀て又雨る　去
京日
あちらむくほとて巣の巣も咲　ゆ
、、
義　山　咲　よ　ゐ　こ　の　巣　植
□神祇哉
施猫為撰よ深れて広うある　ト尺
仏病とる
ゐらぬ役者　蓑冥かあき　ム美
芝さも紀流よ日　翁
初稿の札のあつちこちよう　西旧
紀元上の候冥ハ月よ六日つ、　不物
哉

△秋叙哉
ゐの芝尾の一段とよき　俊小
夕コ
よきの見巣ハ佛切さき　殯
るう灯ハ日をくゝ〳〵〳〵〳〵　楷風
俤の髪そる分の夕くき　之巣
山カタ
後生那ひの深　庶庵泉笑　六之
地獄洪通会の巣の巣ハ掛さや　巣
ら立つ冥悲の札　自牡
△名月哉
玉子酒酔時よ須戸を打洗し　翁
一色月　冷も賛らぬ大浪のあと　杉風
而言持麗よ俤の江の考を移て　翁
野　あゝ鹿の牧の冷君撰ミよ　キ角
俤の一夢　夕日を月よ投て　文リ
紀の俤や秋寒　リト
底算よ度舎遠るあの風　角
猿蓑　名霊　嘯ゝき　し
さ月まつか巣の巣の巣るゝむ　破笠
△鹿。山。天哉
あよふ夢や鹿　翁
松明よ波荷四く秋の風　相楽
寒りよ〳〵鹿の衰しる月　翁
あをぼるうよ深美の山　二楽
隈とりの醤よりり月の為〳〵里　紀之
秋を度去の床のやまうせ　ト尺
天下一作田稲を了ふる　翁
浅舎羽の浅の新よ天〳〵りや　似美
やよ時ゐ天　帝のさゝ　美浦
△月作恋哉
赤土　捨灯を抜〳〵て眠る　才丸
と〳〵さ〳〵る女房の考文て　翁
次白　マクラ　ヨマキ
血捨の森まれ秋や君ふむ
幽昊ハ本履をぱいて杖つゆて　丈志

衣流の園より遥ふにつたし　素孤
山リン

せんきい　全
〈衣類。大神殿
蔦入の天の羽衣
のハすり　掛る
もの米　狭うら
狭ふる〈ハ　敷浪と
袴むつ　き上
袴　兄より
垣君。兄より
翁い　流の
灯のむ　りも
芳砧　和お殘
らすこ下ら　蔓る字殘の中みも正
□浜宮殘変稜

居衣
公主
上殘
夕風
大
芳砧
和お殘こ下ら
蔓る字殘の中
正稜こ去の殺の和ハ強て制する変化ふ也
変稜

貞　角　力　猪　さ　張　する　枯リン
全　堰　と　を　の　ま　さ　よ　を　〈〈〈〈
雪　屋　の　猪　さ　よ　潛　り　初　する　潮　五
本　狭　よ　明　る　う　ふ　り　し　庭　の　松　去　加
狩　る　よ　う　、　る　人　て　の　奥　胡　及
式　る　よ　ふ　う　て　矣　の　痕　ル　ふ　き　一　井
若　代　る　ふ　き　ハ　賛　ル　乱　巻　い　姓　就
を　第　る　行　や　う　く　ふ　い　弱　り　あ　い　自　犯
接　る　拉　へ　い　ハ　ル　も　ま　め　り　ま　ル　ふ　用
和　元　蔓　す　者　の　を　う　し　き　る　む　の　山　口
から　庭　を　素　あ　く　ミ　る　む　の　山　不　ふ
はら　へ　と　又　ま　と　ま　の　ま　さ　よ　を　く　ふ　ル
鋪　る　い　つ　る　角　の　出　女　呼　枯
コノハ　少
月　鉢　の　元　て　文　四　く　あ　と　の　新
香　う　胡　の　を　る　い　出　枯　子
壬　八
新　遠　の　一　弓　床　よ　て　入　る　欠　案　出　唐
あ　唐　つ　う　〈　い　塔　巻　ハ　る　い　九　蔓
音　の　ハ　入　ミ　れ　る　乃　吳　市　て　る　よ　入　る　作　の　鞠
さ　く　ま　を　る　て　る　よ　入　る　作　の　和　俳
新　の　京　ハ　ハ　酒　の　和　俳

大町
文英
文秀
翁

蔦　と　う　ま　く　人　を　足　ま　う　る　て
流　の　時　ふ　る　い　夕　く　き　の　月
乎　笛　を　新　う　て　会　す　る　秋　の　風
者　葉　の　名　を　新　り　ハ　元　集　め
汐　、　ソセン
仮　神　ま　う　ら　ひ　ろ　い　ト　市
ま　公　の　ム　を　う　〈　て　ま　ひ　〈
ち　つ　と　迫　れ　ハ　ま　の　ま　る　乃　去　本
ハ　ノサカ　有
百　日　の　い　つ　き　初　め　て　証　の　夢　秀
云　付　て　ま　る　た　ご　相　の　敷　社
軒　て　ま　り　と　ハ　ま　れ　ま　ハ　雪　仲
深　る　て　女　を　〈　〈　後　者　と　作　曲
海　る　ま　る　て　め　す　張　ま　尼　家
号　知　を
訳　ル　ま　い　る　い　い　ふ　ま　す　母　風
併　法　ル　せ　法　ル　ま　う　て　ま　ル　敷　舎　敷
い　ろ　は　て　て　万　す　ル　ぬ　る　す　ふ　一　ツ　蔓　蔓
何　ま　く　と　ま　て　そ　こ　へ　酒　一　ツ　蔓　蔓　蔓
ま　孫　さ　り　ま　こ　そ　こ　へ　酒　一　ツ　蔓　蔓　蔓
ま　き　こ　れ　と　撰　と　ま　に　ま　き　ま　き　蔓　蔓　蔓
小　戦　の　相　る　ま　る　ま　に　ま　き　ま　き　蔓　蔓　蔓
和　俳　ま　う　い　る　ま　る　ま　に　ま　き　ま　き　蔓　蔓　蔓
新　う　い　る　陸　る　を　や　り　明　て　亜　元　美
何　ぢ　や　や　頃　て　ま　て　眠　こ　ひ　イ　吹
焼　入　ル　ま　り　あ　と　の　い　ま　ま　和　本
法　海　新　覚　て　ま　る　ハ　ば　い　一　人　伯　楓　り　ま　琴
文　星
む　く　ら　新　立　て　ル　遊　の　末　足　え　す　物　脳
新　ふ　あ　と　ま　立　て　ル　遊　の　末　足　え　す　物　脳
時　立　の　演　流　ら　ら　邪　後　の　縄　香　鈴
き　上　ハ　正　稜　こ　去　の　和　え　殺　の　ら　用　も　さ　せ　屑　為
て　の　変　稜　ま　も　ま　す　の　為　お　き　為　る　弱　く　変　る　入　る　ル　強
踏　考　江　湖　〈　〈　〈　る　〈　〈　〈　る　〈　〈　〈　る

播州　姫路　灰屋輔二
備中　倉敷　太田屋六藏
備後　福山　笹屋喜兵衛
雲州　松江　尾崎屋喜三右衛門
因州　鳥取　油屋仲藏
藝州　廣嶋　世並屋伊兵衛
長門　萩　山城屋彦八
豊前　下関　野上屋權左衛門
豊前　小倉　中津屋卯助
肥後　熊本　小嶋屋義八郎
肥前　佐賀　紙屋惣右衛門
心齋橋安堂寺町北　秋田屋太右衛門
仝　博労町北　河内屋茂兵衛
仝　南久宝寺町北　伊丹屋善兵衛
仝　心齋橋南　松村九兵衛
仝　南本町　森本專助
仝　本町北　鹽屋弥七

夷す　夏姐

山カタ

トラ

右正徳三丙申の夏仙元

△の字留仕様

右様

一、名付

一、足袋

一、ぬの名

三ノ十

浪

玩

ツルモ

文様

昨日業よ搗の月りるい松尊の

旦餅の表の君う祇あれや秋の四の

お六ハ天和芳爺の汲波又ハ古俗の作よ

うらすの字留よおく時ハ特徴の作よ

ぬの屋ハを宝むる稲あれハ更ら留よ

代表為ハあふくてハけハす

義の稲ゝもくゝ火の名の浪

移りもくゝ片ハ上の編も曲れとれ

のト切字を入るハあるをぬトハ

くぬさうけんをよゝ

吉今十五　吹よ

ゆる人ハあよ用るすあれ

仙美

杉風

美

爺

伝徳

重二

文物

蕉

蕉角

桃妖

侮印禄六孫